

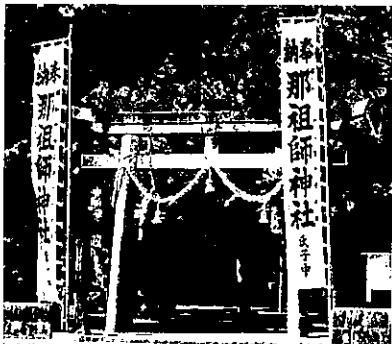
地域と「舞い」

六百年の祝典が昭

平成二十二年十一月二十三日
（火）、勤労感謝の祝日、上対馬町

したのが、この神前神楽舞（浦安の舞）です。

和十五年（一九四〇年）に行われ、その奉祝会が制定



那祖師神社

浦安の舞は、巫女の舞う神前神楽舞で、もと巫女の神懸かりの舞が奉納舞にかわつたものといわれ、現在も多くの神社で奉納されています。浦安とは、「心のやすらか」という意味で、平和を祈る心の舞です。皇紀二千

む女子四人による「浦安の舞」が奉納されました。二人は高校生、二人は中学生です。

豊地区にある「那祖師神社」では

を表現し、そうして人々の繁栄を祈る心の舞)と、「鈴の舞」(この舞は安泰の舞と言われ、三種の神器をかたどつた鈴を手に舞う舞で、鈴の清らかな音色が万物を清く美しい響きが神と人との心にふれあい、やすらぎ、喜びを意味している)を厳かに舞い奉納しました。

豊の那祖師神社（大明神）は
旧藩政時代国主により建立され
たもので、この神社内には島大
国魂神社遙拝所があつたようで
すが、今はこの那祖師神社と島
大国魂神社は合祀された形にな
つているようです（『上對馬町
誌』）。現在の祭礼はこの島大
國魂神社、那祖師神社、若宮神社
(豊の泉間北東のナンガ浦にあ



浦安の舞

祖師神社で行われています。以前は、旧六月三日の祭礼で中学生による舞いが行われていたようですが、今はこの大祭（新嘗祭）で、女子による舞いが行われています。かつて（昭和四十年代まで？）は、出店が軒を連ね、演芸大会も併せて行われるなど、古き対馬の神社の大祭であつたと思われます。

現在、上対馬ではこのような巫女による舞いが行わっている神社は、隣の鰐浦、そして豊崎の計三カ所しかありません。伝統を語りついでいくことは大変なことです。人（組織、指導者、舞う人）、もの（道具、など、古き対馬の神社の大祭であつたと思われます。

施設、資金)、そして何より心(誇り、感動、情熱)の、どれもが必要で、それが欠けると途絶えていきます。この行事は、古くから伝統で神事であつたものですが、ここ豊地区では今でもその伝統を守り受け継ぐ人、もの、心があるということです。

町の活性化のためのイベントとしてその内容が昔とは変化をしてきているかもしれません。しかし、子どもたちが実際に体験をして「舞う」。地域に伝わる伝統を守り受け継いでいる大人たちに接することは少なからずも郷土の伝統について関心を持ち、そのことが対馬の伝統のすばらしさに積極的に関わり、伝えていくとする態度となっていく。私たち文化財保護に携わるものにとって、何が大切なことをあらためて教え

そして、ここで舞を奉納した中学生2人は、この三月で廃校となる豊中学校の生徒として最後の巫女であることも付記しておきたいと思います。(宮脇好和)